

1. 都心・ウォーターフロントのめざす将来の姿

1-1 背景

神戸は、緑豊かな六甲の山々、穏やかな瀬戸内海、温暖な気候など自然環境に恵まれ、旧居留地や南京町、北野異人館など都心での特色ある魅力的なエリアや 1,000 万ドルとも言われる夜景などを有する美しいまちである。

慶応3年（1868年）の開港以来、港町として人・もの・情報・文化が集まり、行き来する玄関口としての役割を果たし、わが国を代表する国際貿易港として、さらに世界からアジアへの船舶ネットワークの拠点として発展を続け、港は市民の生活基盤、経済基盤として重要な役割を担ってきた。

特に、高度経済成長期以降は、神戸港において港湾物流のコンテナ化の進展や船舶の大型化などに対応して物流活動の中心がポートアイランドや六甲アイランドなどの沖合へと展開する一方で、沿岸の古くからの港湾地区においては、施設の老朽化や活動の低下が目立つようになった。また、モータリゼーションの進展を受けて、阪神高速3号神戸線（昭和45年）や浜手バイパス（昭和61年）など広域的な幹線道路ネットワークが整備され、港湾関連の陸上輸送も貨物鉄道から大型トラックにシフトするようになった。

この間、都心では三宮が神戸の陸の玄関口として発展し、広域商業などが進展するとともに、旧居留地や南京町などさまざまな地区で魅力あるまちづくりが進められた。

このような状況の変化の中で、メリケンパーク（昭和62年）やハーバーランド（平成4年）、HAT神戸（平成10年）など沿岸の一部の港湾地区において、物流等の場から親水機能・商業機能・居住機能等を導入した再整備が進められてきている。

都心・ウォーターフロントには、六甲の山々、港、数々の個性的なエリアなどさまざまな魅力がある上に、都心とウォーターフロントが近接しているという他都市にはない恵まれた環境があり、さらに、周辺には空港や新幹線など、広域交通インフラが整っており、その潜在力は非常に大きい。一方で、広域的な幹線道路により都心とウォーターフロントが分断されている問題もある。これら潜在するものを最大限にいかし、弱みを克服しながら、都心とウォーターフロントを機能的にも空間的にも一体化し、多くの人で賑わう人中心のまちとしていくことが求められている。既に、神戸震災復興記念公園（みなとのもり公園）の整備や旧神戸生糸検査所の改修、三宮駅の交通結節機能の強化、南北の歩行者動線整備、眺望景観形成に関するルールづくりなど、取り組みは始まっている。

今後は、少子・超高齢化が進行する中、人口減少や超高齢社会、経済のグローバル化といった社会経済情勢の変化をふまえ、神戸の持続的発展のために、この都心・ウォーターフロントにおいて神戸独特の先導的な取り組みを進めていかねばならない。



都心・ウォーターフロントの現況

1-2 「港都 神戸」グランドデザインの策定趣旨

「港都 神戸」グランドデザインは、都心・ウォーターフロントのめざす姿である長期的な将来構想を描いたものである。

都心・ウォーターフロントのめざす姿の実現にあたっては、市民・大学等・事業者・行政が長期間にわたり継続的にさまざまな取り組みを進めていくことが必要であり、そこでは市民・大学等・事業者・行政がめざす将来構想を共有し、協創による取り組みを推進していくことが求められる。このため「港都 神戸」グランドデザインを策定し、共有する将来構想とするものである。

「港都 神戸」グランドデザインを策定する上での前提は、次のとおりとする。

- ①主な対象エリアは、ハーバーランドからHAT神戸までのJR以南のエリアとし、一部ポートアイランドを含む。(図1-1 都心・ウォーターフロントの構想対象エリア)
- ②将来構想の実現の時期は、概ね20~30年後とする。
- ③本構想の取り組みの主体は市民・大学等・事業者・行政とし、その実施にあたっては適切な役割分担のもと、協創による継続的な取り組みにより進めていくものとする。
- ④構想図やイメージパースなどを含むこの将来構想は、実施計画や事業を決定・拘束するものでなく、取り組みの方向性を示すものである。
- ⑤個別具体の取り組みについては、その時点での社会経済情勢等をふまえ、関係者間で十分協議・調整の上、進めるものとする。

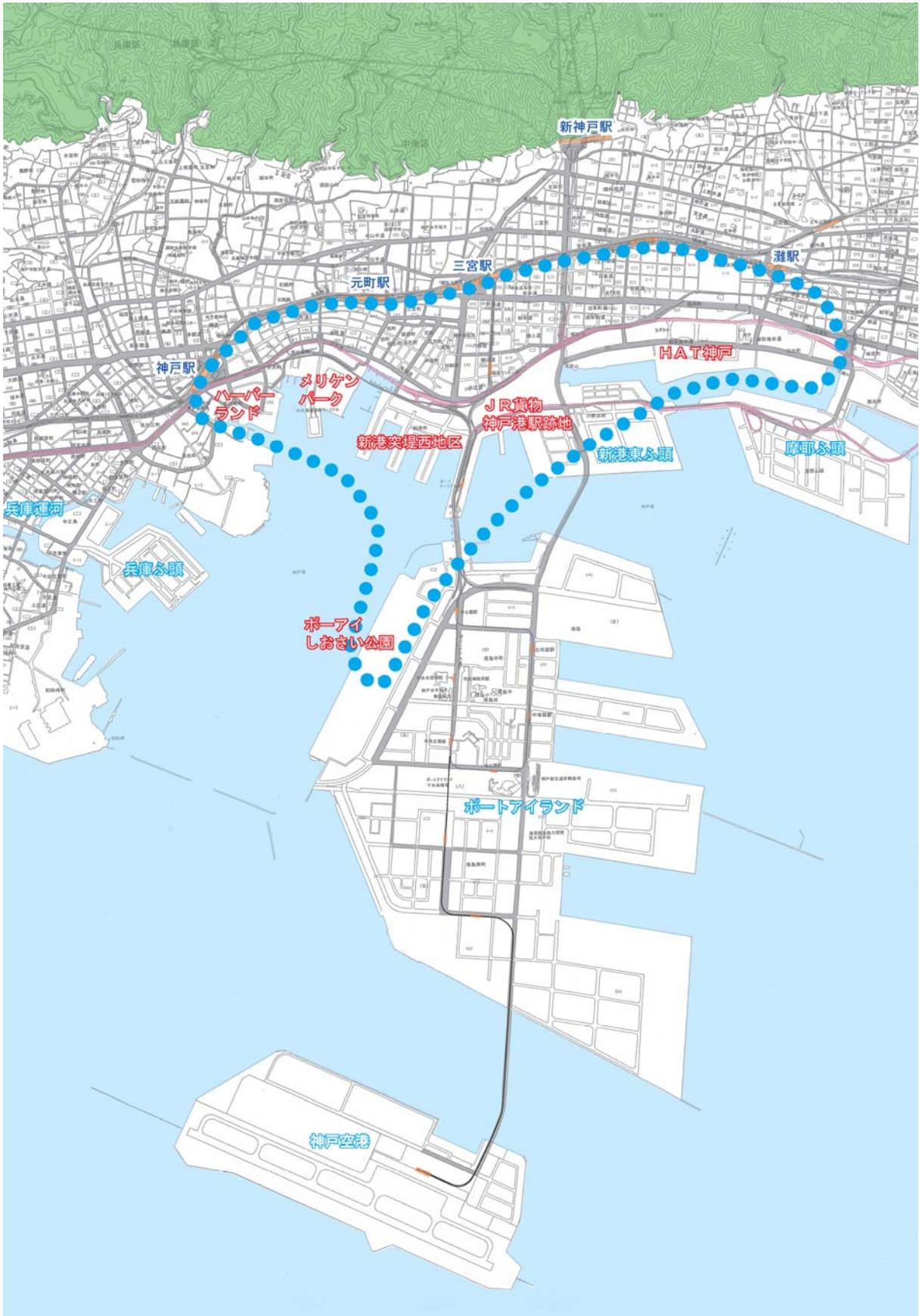


図1-1 都心・ウォーターフロントの構想対象エリア

1-3 めざす姿の全体将来像

(1) デザイン都市の具現化

神戸のウォーターフロントは市域の南端において東西に広く拡がっており、都心・ウォーターフロントの他にも兵庫運河、須磨・舞子など、デザイン都市に資する親水性をいかしたさまざまな利活用が可能な空間が多く存在している。将来的には、それらの連携を図っていくことが必要であるが、特に、都心・ウォーターフロントは先導的なエリアとしての役割が期待される。

デザイン都市とは、「住み続けたくなるまち、訪れたくなるまち、そして、持続的に発展するまちをめざして、神戸のもつ強みをいかし、デザインによって新たな魅力を協働と参画で創造する都市」としており、基本方針として「まち・暮らし・ものづくりのデザイン」を掲げている。

都心・ウォーターフロントのめざす姿をデザイン都市の3つの基本方針に沿って示せば、

- ・「まちのデザイン」として、六甲山や海など美しい自然環境や都心・ウォーターフロントにある歴史的資源などを十分にいかし、眺望やまちなみなどさまざまな魅力あるまちの景観づくりを進める。歩いて楽しい回遊空間づくりを進め、市民・来街者で賑わうまちをつくる。
- ・「暮らしのデザイン」として、緑豊かな、あるいは親水性を有する高質なオープンスペースを伴う生活環境を通じて、ウォーターフロントでの新しいライフスタイルを提供する。ウォーターフロントにおいて、文化芸術など文教機能の導入やさまざまなイベントを展開することで、知性・感性などを高める環境づくりを進める。
- ・「ものづくりのデザイン」として、クリエイターなどの人材の育成・集積の場づくりを進め、創造産業の活性化を図る。クルーズ船の誘致など観光産業の振興を通じて付加価値の高いサービスを提供する。

などが挙げられる。

従って都心・ウォーターフロントのめざす姿は、デザイン都市を包括的に象徴して体現するひとつの姿といえ、都心・ウォーターフロントは創造都市戦略「デザイン都市・神戸」を具現化するリーディングエリアと位置づけられる。

(2) 都心・ウォーターフロントの全体将来像を考える上での基本的な視点

都心・ウォーターフロントの全体将来像を考える上での基本的な視点を以下に示す。

①多くの人が集う

市民や国内外からの来街者などさまざまな人が、働き、住み、学び、遊び、交流するとともに、買物・観光・文化芸術スポーツ活動など多様なニーズを満たすことのできる、多くの人で賑わう魅力ある”新しい港町“をめざす。

②神戸の特質、地域資源を最大限にいかす

都心・ウォーターフロントは、港に加えて、恵まれた自然環境や歴史的建造物など地域資源が豊富である。また、スイーツやファッションなど神戸ブランドを有し、開港以来の進取の市民気質がある。これらの神戸のもつ特質や資源をまちの空間形成やまちの賑わいの創出に最大限にいかすとともに、都市のブランドを高める。

③新たな都市機能を導入する

今後、神戸の持続的な発展のためには、製造業や運輸業などに加えて、新しい産業が求められる。都心・ウォーターフロントにおいて、観光産業だけでなく、創造産業や知識産業などといった新しい都市機能を導入するとともに、職住近接の新たなライフスタイルを提供する。

④環境創造の場づくりを推進する

緑化や風の道の創出、公共交通利用や自転車活用の促進、再生可能エネルギーの導入など低炭素社会の実現に資するさまざまな先進的な取り組みを推進し、都心・ウォーターフロントを先導的な環境創造の場としていく。

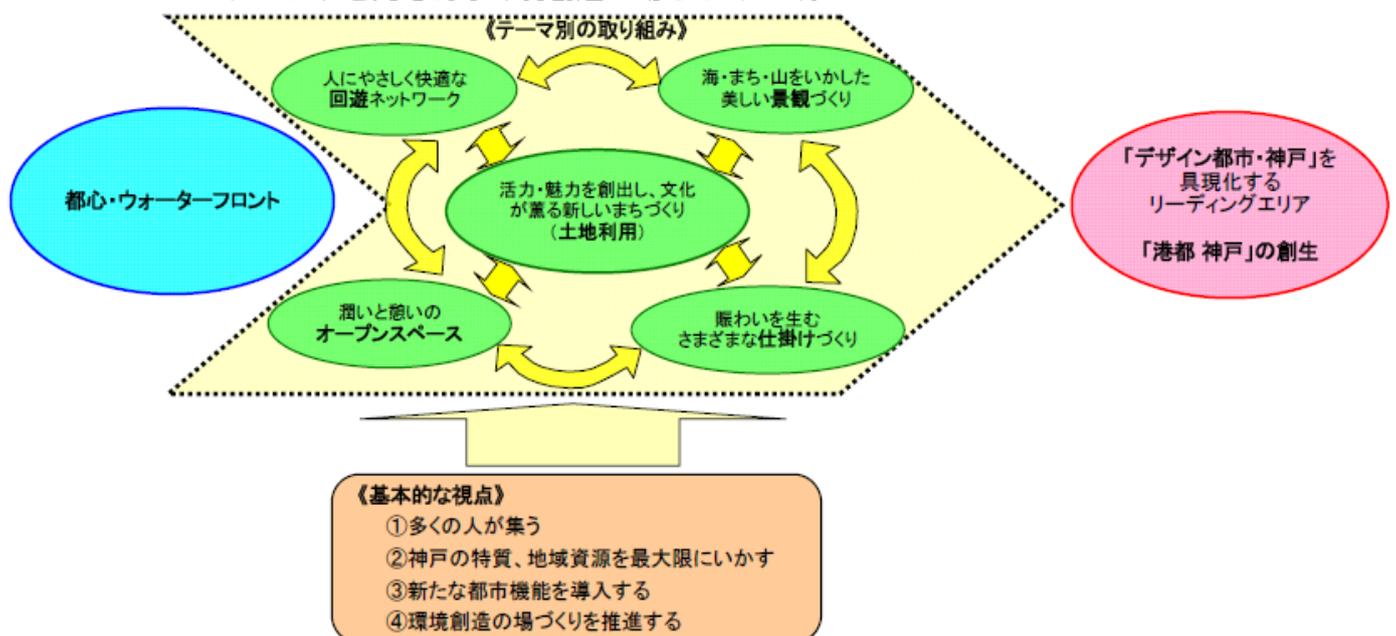


図1-2 「デザイン都市」の具現化の考え方

(3) めざす姿の全体将来像 ～「港都 神戸」の創生をめざして～

さまざまな人々が集う、快適なまちであるためには、まちが安全・安心であることは言うまでもない。

その上で、多様なニーズに対応する都心・ウォーターフロントの都市機能の形成を図る。特に、新港突堤西地区及びJR貨物神戸港駅跡地において、地域資源をいかしながら新たな都市機能の導入を図り、魅力と賑わいある空間を創出していく。

眺望景観など神戸を特色づける景観面での取り組みを進めるとともに、港・海を身近に感じるオープンスペースや水際プロムナードを設ける。さらに、都心とウォーターフロントの一体化を図る中で、眺望点・眺望路などの景観づくりやオープンスペースづくりとも有機的な関連性をもつ回遊ネットワークの構築を図るとともに、イベントなど賑わいを生むさまざまな仕掛けづくりを積極的に展開し、「港都 神戸」の創生をめざしていく。

グランドデザインで扱うテーマとその要点を以下に示す。

①活力・魅力を創出し、文化が薫る新しいまちづくり

都心・ウォーターフロントにおいて、今後のまちづくりの方向性として、主に都市機能（土地利用）の面からゾーニングを設定し、ウォーターフロントのゾーン毎にコンセプトを掲げる。特に、新港突堤西地区及びJR貨物神戸港駅跡地を、今後都市機能を導入していくべき“ウォーターフロント都心”と位置づけ、新たな創造産業複合ゾーン及び研究・業務複合エリアとして、その将来計画のイメージを示す。

②海・まち・山をいかした美しい景観づくり

都心・ウォーターフロントには魅力的な景観資源が多くあり、これらを十分にいかしながら、より美しいまちとしていくために、景観の保全育成に関するさまざまな取り組みを継続的に進める必要がある。海・山などを望む眺望景観、海辺を満喫できる水際景観、個性豊かなまちなみ景観、ポートタワーや海洋博物館などのランドマーク・シンボル、“光都”を演出するさまざまな夜間景観など神戸らしい景観形成を図る。

③潤いと憩いのオープンスペース

公園・緑地・広場・水面などのオープンスペースは、まちに潤いと憩いをもたらし、職・住・学・遊など普段の暮らしを豊かにするものであり、またイベントなどでの活用も期待できる。拠点性のあるオープンスペースや水際の連続したプロムナードを創出する。特に、波止場町1番地及び新港突堤西地区でのオープンスペースの将来計画のイメージを示す。

④人にやさしく快適な回遊ネットワーク

都心とウォーターフロントを一体化するとともに、都心・ウォーターフロントでの回遊性を向上させるため、歩く人を中心に考えた回遊ネットワークを構築する。

都心・ウォーターフロントへの自動車交通の流入抑制、環境にやさしい新たな公共交通の導入、三宮駅等の交通結節機能の強化などを進め、歩行者や自転車等が快適に回遊できるような交通環境の形成を図る。

⑤賑わいを生むさまざまな仕掛けづくり

賑わいのある都心・ウォーターフロントづくりのためには、イベントや情報発信(P R)など継続性のある取り組みを実施していくことも重要である。

都心・ウォーターフロントでのイベントの充実やストリートファニチャー、飾花などまちに彩りを添える小道具による演出、クルーズ船誘致、情報発信(P R)などを通じて賑わいの創出を図る。

⑥グランドデザインの実現をめざした今後の取り組み

グランドデザインの実現にあたっては、長期間にわたり、市民・大学等・事業者・行政の協創による取り組みを可能なことから継続的に進めていくことが重要となる。各主体の役割や今後の取り組みの進め方を示す。